今夏も市内でたくさんのスポーツ選手が、目標としていた舞台で輝きを放ちました。今月は、その中から一部の団体・選手の胸の内をご紹介します。

高橋　快吏（かいり）くん　植木　大悟（だいご）くん　清水　唯冬（ゆいと）くん　源川　大遥（たいよう）くん　坪井　柊飛（しゅうと）くん　坪井　勇希（ゆうき）くん

見附者
―夏の拡大版―

見附市ソフトテニススポーツ少年団
男子団体戦メンバーと菊地孝監督

ソフトテニスをする全国の小学生が一番の目標とする大会、第33回全日本小学生ソフトテニス大会が7月29日から31日、山形県で開催されました。男子団体戦は都道府県別48チームが出場。新潟県代表8人の内、6人が見附市ソフトテニススポーツ少年団の6年生で、準優勝に大きく貢献しました。準優勝は県勢初の快挙です。低学年のころからほぼ毎日、練習を積み重ねてきた彼らの努力が実った結果です。

「準優勝はうれしいけど、優勝まで惜しかったので悔しい」と話すのは源川大遥くん。他の5人も嬉しさと悔しさが半々と口を揃えます。

県勢初の快挙にも、結果に満足しない彼ら。これは6年生の夏に全国大会で勝つため、入団当初から長年かけて積み上げてきたものへの自信の表れともいえます。

技術的な進歩

同チーム伝統のテニスは何本でも打ち合いつなぐテニス。しかし、それだけでは勝てないと、多彩なテニスを何年もかけて磨き上げてきました。

「約10年前、同少年団の男子が全国大会で団体3位になって以来、この壁を越えられなかったのは、打ち合い以外のネットプレーなどに苦しめられてきたからです」と話すのは菊地孝監督。序盤にネットプレーを仕掛けられ、自分たちのテニスができなくなることが多かったといいます。

そこで打ち合いだけでなく、ボレーやスマッシュなどのネットプレーを練習。これができるようになったことで、相手の選択肢を狭め、自分たちのプレーにもっていくことができるようになったといいます。

礼儀・謙虚さを大切に勝って喜ばれる選手に

礼儀と謙虚さ

こうした技術的な進歩に加え、人間的な成長も彼らのテニスに影響を与えています。

「テニスだけ頑張っても勝てません。勉強や生活態度がなっていないと勝てません」と語るのは団創設者の大野淳文団長。

「勝っても喜ばれる選手になる」というのが団の伝統。相手にボールをとってもらったときは頭を下げる、勝っても相手を威嚇したり、大げさなガッツポーズをしたりしないといったことを守ります。

毎年、全国のトップチームから練習会に招待されるのも「技術があるからだけではありません。こうした礼儀が認められているからです」。

他県の強い選手と比べて謙虚と言われる同チームの選手たち。この謙虚さがテニスに対する姿勢や気持ちに影響を与え、テニスの実力にもつながったといえます。

見附市ソフトテニススポーツ少年団団長
大野　淳文さん

負けん気の強さ

清水唯冬くんのこれまでで一番悔しかった出来事は、「（チームメイトの）坪井君たちに負けたこと」。これについて菊地監督は「チーム内でも『負けたくない』というライバル意識が強いです」と話します。

今年に入り、清水唯冬くん・源川大遥くんペアが県トーナメントで優勝、坪井勇希くん・柊飛くんペアは東日本大会、北信越大会で優勝しました。こうした個人戦での結果が出始め、選手たちはお互いに「次は俺も」という意識が芽生えたといいます。お互いに切磋琢磨すると同時に、全国でも勝てるという自信を深めていきました。

同大会で県代表メンバーとして女子団体戦に出場し、全国５位に輝いた本間友里那さん（左）と入澤瑛麻さん

本番でも見せた伝統

そんな中で迎えた全国大会。試合中、選手たちは緊張しなかったといい、決勝まで全てストレート勝ち。

それでも、勝って大げさに喜ぶような態度を示すことはなく、団の伝統である「勝っても喜ばれる選手」を体現して見せました。その証拠に大会終了後、他県のチームから祝福されるチームの姿がありました。

今年度、創設25周年を迎える同少年団。長年かけて培われてきた良き伝統は、後輩へと受け継がれていきます。

8月16日～19日に千葉県で行われた全日本ジュニアソフトテニス大会では、団として出場し、男子同メンバーが団体戦で優勝。個人戦でも坪井ペアが優勝、源川・清水ペアが準優勝し、団体・個人ともに全国を制しました。